

コルリの繁殖生態

宋榆鈞・高章¹・何敬杰²

1 東北師範大学生物系

2 長白山自然保護局

訳 福井和二

コルリ (*Luscinia cyane cyane* Pallas) は長白山での主要な食虫鳥類の1種で、彼の繁殖習性に関しては、いままで、国内により報告が見られない、そのため、われわれは1963~1965年と1979~1980年の4月から10月の間、長白山地域においてこの鳥の観察を行った。

コルリは長白山地区では夏鳥で、毎年4月末から5月初めにかけて渡来し、10月には渡去する。滞在期間は140~150日。渡来した初めは林縁、灌木叢あるいは溪流の岸辺にある疎林などに生息し、繁殖期には主に山地の針葉樹林帯(海拔1100~1500m)と針葉樹と落葉広葉樹の混交林帯(600~1100m)に生息する。5~7月の観察結果によると、山地針葉樹林帯での観察33時間における平均遭遇率5.8羽、針葉樹、広葉樹混交林では観察29時間の遭遇率4.1羽であったことから、彼らは山地針葉樹林帯に好んで生息すると見られる。

すこぶる機敏で、林床の下生えの間を隠れて採食行動し、よく鳴く声を聞くことはあるが、身近に姿を見ることは難しい。全て昆虫食で、鱗翅目の幼虫、鞘翅目昆虫とクモ類などを食べる。

5月下旬から6月上旬に雄は囀りを始める。鳴き声は澄んでいてよく響き、美しく聞こえ“zi, zi, zi, …… liwu liwu”, “zi, zi, zi, zi …… liao”; “zi, zi, zi, zi …… liaoli”あるいは、“zi, zi, zi, …… zili”などと強烈に囀る。とりわけ午前には囀り、何回も絶え間なく囀る。夕方に囀ることもある。林床が灌木で被われた場所の梢で囀ることが多く、下生えの枝で囀ることもあるが見つめることが難しい。この時の雌は、さらに隠れていて、雄が囀っているとき、何度もよく見ながら探さないと見つめることは出来ない。

巢；営巣は樹木の密生した鬱閉度が高く、薄暗い下生えの多い場所を選ばれる。巢は地上の大きな樹のもとに落葉が層をなした凹み、大きな岩の下で苔の生えているところ、土の断層などの洞穴などが利用されている。これは、長年の観察で探し当てた5巢の営巣環境である。巢は碗状でサイズは外径8.0~16.0cm, 内径5.8~9.0cm, 高さ6.0~7.2cm, 深さ4.2~5.2cm, (n=5)であった。巢の外壁は木の葉、細い枯れ枝、松葉、枯れ草、苔類などで構成され、内壁は葉柄、細い草の茎が用いられ、その上に乾いた草の葉や毛根が敷かれている。5月下旬に営巣を始め、雌だけが巣造りを担当し、雄は巢の近くで囀るだけで、やめようとしなない。巢は3~5日で完成する。

卵；巢ができると1日おいて産卵が始まり、1日に1卵、5~6卵を産む。観察によると1繁殖期に2回繁殖する。卵は卵円形で鮮やかな藍緑色で、斑点はないが、ただ鈍端部に淡い色の帯がある。卵サイズ(n=18)14.5(13.7~14.9)×18.6(17.8~19.2)mm, 卵重量1.97(1.8~2.2)gであった。

産卵が終わると1日おいて抱卵を始める。抱卵は雌のみが担当し、抱卵期間は12~13日である。

雛；孵化は2日で完了し、1日目で60~83.3%が孵る。孵化直後の雛は眼も耳も塞がっており、体は裸、わずかに頭頂、臉の上、肩と背部に長い絨毛が生えている。

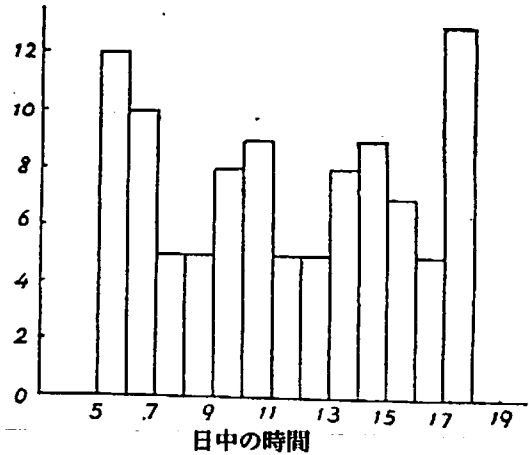
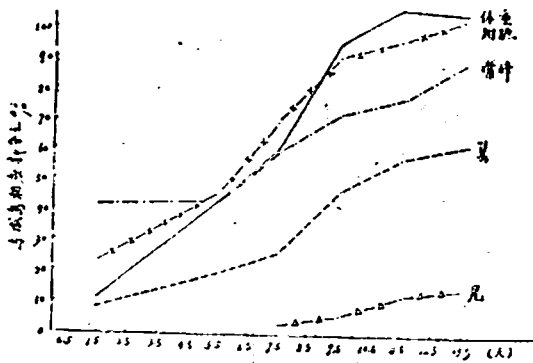
1巢(雛5羽)、0.5~13.5日の観察、計測による雛の形態と行動の変化を表1と図1に示す。

図1によると、コルリの雛の巣立ちまでの期間の体重と各部位の成長状況は一様ではなく、

表1 コルリの雛(0.5-13.5日)の形態と行動変化

日齢 (日)	体重 (g)	体長 (mm)	翼長	嘴峰	附蹠	尾長	形態および行動
0.5-1.5	2.1	30.7	5.5	4.6	6.2	/	
2.5-3.5	5.0	41.6	12.3	5.0	11.8	/	耳孔開き始める
4.5-5.5	6.8	42.8	14.6	6.5	13.1	/	体羽、羽鞘が開き筆状に羽毛が生える
6.5-7.5	9.2	50.7	19.7	6.7	18.5	2.1	眼が開く、初列風切羽第1羽鞘長8.8mm
8.5-9.5	14.3	51.7	34.7	7.1	23.7	3.7	風切羽の羽鞘を開始める、絨毛脱落、体羽黄褐色、黒斑、行動
10.5-11.5	16.0	66.7	42.7	8.7	25.0	7.5	羽毛が豊茂、羽色成鳥雌に似る、嘴角淡黄、巣から飛び出す。
12.5-13.5	15.8	70.3	46.0	10.0	25.7	8.3	尾羽は扇状に、人を忌避する、測定後巣へ戻すが、飛び出してしまふ。

図1 コルリの雛の体重と各部位の成長曲線 図2 コルリの一日の給餌回数配分 回/時間



体重の増量が最も早く、成鳥の体重を越えるほどになる。続いて附蹠が成鳥の98.8%、嘴峰が89.3%、翼長はそれより遅く、尾長にいたっては15.4%と最も成長が遅い。したがって、巣立ち後の幼鳥はしばらくの間飛翔が不格好である。多くの観察によると巣立ちした雛たちは、草むらや灌木の茂みの中で活動している。

雛への給餌は雌のみで行われ、雛の6.5日齢の1巣(4雛)における終日育雛状況観察によると、夜明け4:20以前に活動を開始し、1日14~15時間、給餌回数99回、その1時間毎の給餌回数を図2に示す。

育雛中は異常なほどに機敏で、巣に戻ってくる方角、巣への入り方も多様である。観察した巣は、アカマツ、広葉樹の混交林中の、ねじ曲がったカエデの幹の樹洞に営巣され、周囲には草が密生し、巣の前には大きなチョウセンアサガオが茂り、巣を隠すようになっていた。雌鳥は給餌のため巣に戻るのに、あるときは、先ず草むらの中へ降りて、草むらをくぐるように左手より巣に入り、あるときは樹洞の背後に降りて、その後突然巣の中へ飛び込むことがあり、またあるときはゴジュウガラのように頭を下にして幹を走り降り、草むらに飛び込んだ後警戒しながら巣へ入る。毎回親鳥が巣へ戻ると“zi,zi,zi,”という微かな雛の鳴き声が聞こえ、さらに観察しようと近寄ると、すぐに異常に気がついて給餌をやめ飛び去ってしまう。巣から10mほど離れ、静かにしていると前述のように巣に戻り、給餌を始める。夕暮れ、巣にはいる前にはことさらに警戒し、しばらく周囲を見回した後、異常が無かったら巣に入り、もし、何かの危険を感じたらすぐ飛び出せるように、頭を入り口に向けて雛の上に座る。このように親鳥の警戒心の強いことが雛の繁殖成功率を高めている。我々が観察した5巣のうち、人に巣を壊された1巣を除き、他はすべて100%巣立ちした。